

「思考力・判断力・表現力等」を育む「読むこと」「書くこと」の指導の工夫 ～単元を通じた技能統合的な言語活動を通して～

糸満市立糸満中学校教諭 久山智恵子

I テーマ設定の理由

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編」（以下「中学校解説外国語編」と表す）における「思考力・判断力・表現力等」の育成に関わる目標として、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、（中略）外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。」ことと述べられている。

また、「中学校解説外国語編」の改訂の趣旨では、授業における英語での言語活動の割合が改善されてきていると言われているが、「読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある。」と示されており、技能統合的な言語活動の取り組みが必要であると考えられる。さらに、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書（中学校 英語）によると、全国的に見ても調査問題⁸（読むこと）の「把握した内容について、適切に応じる」という技能統合型の問題の正答率が低いと報告されている。ただ単に、内容を理解するにとどめるのではなく、得た情報や事実に対し、考えたことや感じた事などを、表現したり伝え合ったりすることのできる力の育成が求められているということが明らかになった。

これまでの実践を振り返ると、教科書の内容理解で満足し、読んだことについて考え等を書いて表現するという授業実践が不十分であった。そのため、今後の指導では、「書くことを想定して読み取らせ、それを基に書かせる」という技能統合的な活動を取り入れた授業の工夫が必要だと考える。

本研究の対象学年は中学1年生である。「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編」（以下「小学校解説外国語編」と表す）によると、自分が必要とする情報を得る活動において、児童が読む英語は、語句や1～2文程度の単文であると述べられており、上記で挙げた課題に対し、入学したばかりの1年生が取り組んでいくことは難しいと考える。

そこで、本研究では最終目標へ到達するための初期の段階として、どのような系統だった指導が可能かを検討する。目的や場面、状況などに応じて自分の考えや気持ちなどを表現することを取り入れ、「読むこと」「書くこと」の技能統合的な言語活動の充実を図ることで、外国語科における「思考力・判断力・表現力等」の育成に繋がるものと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

外国語学習において、「読むこと」「書くこと」の技能統合的な言語活動を実践することによって、「読むこと」「書くこと」の意欲を高めることができ、外国語科における「思考力・判断力・表現力等」の育成ができるであろう。

III 研究内容

1 英語科において求められる「思考力・判断力・表現力等」とは

「中学校解説外国語編」によると、外国語科における「思考力・判断力・表現力等」の目標において、『簡単な情報や考えなどを理解する』とは、（中略）何を聞き取るべきなのか、読み取らなければならない内容は何なのか、を判断し、『聞くこと』や『読むこと』を通して情報や考えなどを理解することである。、『これらを活用して表現したり伝え合ったりする』については、そうやって理解した情報や考え等を整理した上で、（中略）何をどのように取り上げるかを既存の知識や体験などとも関連付けながら判断し、『話すこと』や『書くこと』を通して表現したり伝え合ったりすることである。

と述べられている。

さらに、「中学校解説外国語編」の趣旨において複数の領域を統合した言語活動の不十分さが指摘されていることから、本研究においては、以上のことを踏まえ「読むこと」「書くこと」の技能統合的な言語活動を通して、外国語科における「思考力・判断力・表現力等」の育成に迫るものとする（図1参照）。

なお、本研究では中学1年生を対象とするため、実践上の工夫として、3つの点に配慮しながら進めていく。1点目は「音声で慣れ親しんできた言語事項を使用し、負担の少ない活動」、2点目は「興味を抱き主体的に読みたい、書きたいと思えるような自主教材の作成」、3点目は「自然と『読むこと』から『書くこと』へ向かえる活動」である。以上の点を踏まえた結果、「手紙を読んで返事を書く」という技能統合的な言語活動が生徒の実態を踏まえると1番ふさわしいと考え実践していく。

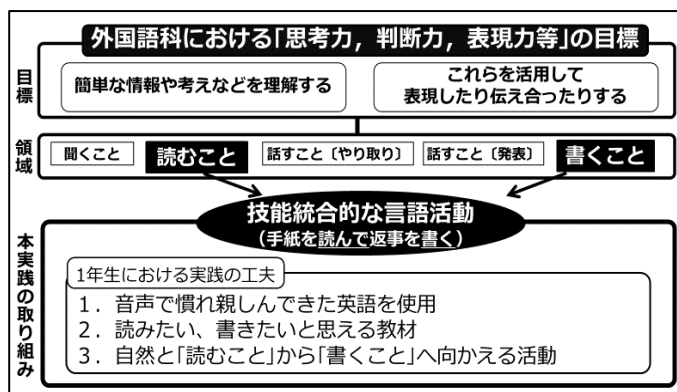


図1 「思考力・判断力・表現力等」を育む本研究の流れ

2 「読むこと」「書くこと」について

(1) 学習指導要領における「読むこと」の目標

本研究においては、中学校「読むこと」の目標アとイの力の育成を目指す（表1参照）。アの目標は小学校外国語科の「読むこと」の目標イを受けており、生徒の日々の生活に関わる話題の中から、身近な学校生活や家庭生活などに関するものについて、読み手として目的に応じて知りたいことや欲しい情報などの「必要な情報」を読み取る力を身に付けさせることを示している。本単元では目的や場面、状況を設定し、生徒が課題意識を持って情報を得たいと思えるような教材を作成し、アの目標の育成を目指す。また、目標イにおいては「概要を捉える」とあり、文章を最初から最後まで読み、書き手が述べていることの大まかな内容を捉えることを目指している。

表1 「読むこと」の目標（小中学学習指導要領より）

領域別の目標 読むこと（中学校）		
ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。	イ 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。	ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。
領域別の目標 読むこと（小学校）		
ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。	イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。	

本研究では、「書くこと」との技能統合的な言語活動を目指しており、書き手が伝えたい内容を大まかに理解した上で自分の考え等を整理して、文章に書くという統合的な言語活動を実践するため、イの目標もアの目標同様に目指すこととする。現行教科書の前半期は音声中心の題材となっているため、教科書のみでの「読むこと」への対応は難しいと考える。そのことを踏まえ、本研究では、小学校において、音声で慣れ親しんだ語句や表現等に加えて、特に教科書で学ぶ単語や文をできる限り活用し、推測可能な単語を入れる程度に理解可能な読み物教材を自作し、生徒にとって負担の少ない活動を目指して取り組んでいく。このような工夫を繰り返すことで、中学校1年生には負担が大きいと考えられがちな「読むこと」の指導を可能にし、「読むこと」の次の段階へと続く足がかりとなると考える。

(2) 学習指導要領における「書くこと」の目標

本研究においては、中学校「書くこと」の目標アの力の育成を目指す（表2参照）。この目標は小学校の外国語科の「書くこと」の目標ア及びイを受けて、語句や表現を書き写したり、例文を参考に書いたりすることができるだけでなく、スポーツ、音楽、テレビ番組などの身の回りのことで生徒の共通の話題となっていることについて、伝えたい内容を正確な英語で書くことができる力を身に付けさせることが記されている。

表2 「書くこと」の目標（小中学学習指導要領より）

領域別の目標 書くこと（中学校）		
ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。	イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。	ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。
領域別の目標 書くこと（小学校）		
ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。	イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。	

本研究においては、中学校「書くこと」の目標アの「正確に書く」を「知識・技能」、「関心のある事柄を簡単な語句や文を用いて書く」を「思考・判断・表現」とし、目標へ迫る。入門期の中学1年生にとっては「読むこと」以上に「書くこと」は難しい領域と考えられるが、指導を重ね、「英語で文章が書ける」という実感を持たせたい。さらに、何度か書かせるうちに、「正確に書く」ということを自然と身につけさせたい。以上のことを踏まえ、これまでの学習や経験の中で触れてきた語彙や表現及び中学校で扱う語句や文を用いて「書くこと」を通して、「思考力・判断力・表現力等」の育成につながる授業の工夫を行っていききたい。

(3) 「読むこと」「書くこと」の指導の手立てと工夫について

バトラー後藤(2013)は「読みの前段階として、子どもは、音声言語が音という単位からできていることに気づかなくてはいけない(phonological awareness)。そして、読みの第一歩は、言語音と文字(graphic symbols)を結び付けるところから始まる。」と述べている(図2参照)。

また、アレン玉井(2010)も「日本人の子どもたちへの英語のリーディング指導で最も重要なことは、まず何よりも英語での音声言語を育てること」と述べている。さらに、「初期段階の英語学習者のリーディングにおいては、まずは馴染みのない単語を音声化することが求められます。音と文字の関係が理解できていれば音声化はたやすくできますが、さらに音声化した単語を知っているならば、それは文の内容を理解する助けになるでしょう」(2019)とも述べている(図3参照)。人が言葉を発するまでの過程を考えると、音声による言葉のシャワーを浴びた子供たちは、徐々に言葉を発し、話せるようになる。そして、小学校1年生の頃より、音声と文字との関係を理解し読んだり書いたりすることに慣れていく。このことは外国語習得時にも同じような現象が起これと言われており、「cat」という言葉を音声化して、「cat=ねこ」であることがイメージできていないと、「cat」という言葉を読めたり書けたりしても何のことであるか理解できていないため、「読めている」とは言い難い。日本語であれば、50音が読み書きできるようになると、組み合わせによっては、相当の量の言葉をひらがなで読み書きができる。また、日本語であれば、長年培ってきた言葉の数が多いため、言葉のイメージ、音声、さらには文字が一致する語彙も多い。しかし、英語という言語は文字と音とが一致しない語が多く、英単語を見ても音声化できないために、英語を母語としている人にとっても読み書きが難しいと言われている。ましてや、英語話者でない我々日本人にとって、外国語である英語の読み書きは非常に難しい活動となる。以上のことを踏まえ、文字指導の前には必ず十分な音声指導を行い、聞いて言える音声単語を増やし、発音と綴りを関連付けて指導することが大切であると言える。

さらに、アレン玉井(2010)は「スキルの成長からすると、リーディングの発達に比べ、ライテ

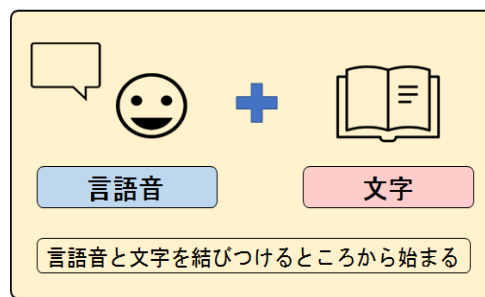


図2 読みの第一歩について (バトラー後藤(2013)を参考に作成)

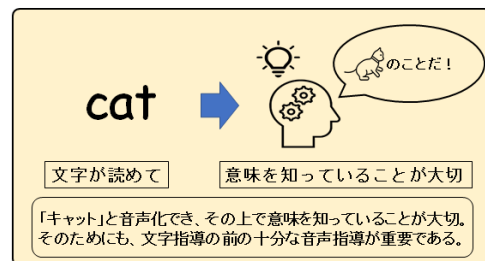


図3 初期段階のリーディングについて (アレン玉井(2019)を参考に作成)

イングの発達には時間がかかる。(中略)ライティングにはリーディング以上に語彙や文法への深い理解が要求され、さらに正しい文体を選択する力などが求められるからである。子どもに最初からライティングの指導を始めることは、特に外国語学習においては、言語的にも認知的にも難しいことである。(中略)リーディングとライティングは別個のものではなく、2つの能力は連動して成長していくと考えている。」と述べており、「読むこと」から「書くこと」への流れで指導することはもちろんのこと、2つの技能を統合させて指導することで相乗効果を生み出すのではないかと期待する。以上のことから、本研究では「読むこと」「書くこと」の活動に入る前には、音声で十分に慣れ親しんだ語句や新出単語を含む基本的な表現を繰り返し活用し、単元を通して「読むこと」「書くこと」の技能統合的な言語活動の指導に取り組んでいく。

3 なぜ技能統合的な言語活動なのか

現行学校学習指導要領解説外国語編において、4技能を総合的にバランス良く育成する活動が求められ、各技能の「言語活動の指導事項」においても、技能統合的な活動事項が含まれている。また、テーマ設定理由の中でも述べたように、「中学校解説外国語編」や「全国学力・学習状況調査」などからも、「技能統合的な言語活動」が不十分であるという課題が浮き彫りとなった。「中学校解説外国語編」外国語科における「思考力・判断力・表現力等」の目標においても、聞いたり読んだりして理解したことを活用して、表現したり伝えあったりすることが重要になってくると述べられており、「技能統合的な言語活動」の充実を図ることは必須であると考えられる。

では、なぜ「技能統合的な言語活動」が必要なのだろうか(図4参照)。実際の生活を振り返ってみると、私たちは普段の生活の中で、聞いたことや読んだことについて、メモを取ったりしながら、考え等を整理し、文章に書いたり、口頭で表現したり伝え合ったりしている。実生活と同じような状況を設定し、言語活動を行うことが自然であると考えられる。また、4技能をバランスよく成長させていく上でも効果的かつ効率的であると考えられる。以上のことから、外国語教育において「技能統合的な言語活動」を充実させることが必要不可欠であると考えられる。

これまでの実践を振り返ると「手紙の内容を理解する」に焦点化した授業は行っていた。また、「手紙を書く」においても、ある読み物を理解した上で書くのではなく、「クリスマスカードを書いてみよう」など、こちらから発信することのみにフォーカスした活動ばかりで、技能統合的な活動の実践は不十分であった。よって、本研究においては、「技能統合的な言語活動」を実施するに当たっては、1単位時間の授業の中で実現するのではなく、生徒の実態(中学校1年生)を事前に調査し、その実態に応じて、単元を通した中で活動に工夫を加えながら統合的な言語活動に取り組んでいく。

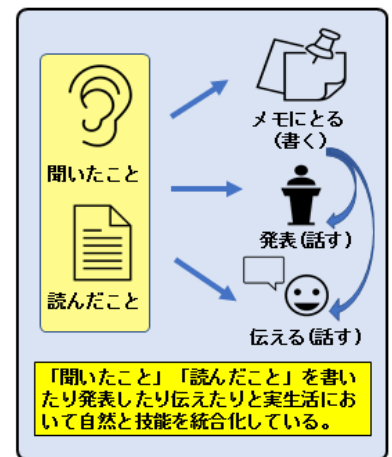


図4 技能統合的な言語活動イメージ図

IV 検証授業

1 単元名 Lesson 2 Do you like animals? (TOTAL ENGLISH 1) 「読むこと」「書くこと」

2 単元の目標

知識・技能	単数と複数概念、使い分けの知識を身に付ける。/How many ~?やWhat do you ~?を用いた文の構造について知識・技能を身に付ける。
思考力・判断力・表現力等	「読むこと」 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取り、概要を捉えている。 「書くこと」 読んだ事を受けて自分の事について、簡単な語句や文を用いて書いている。
学びに向かう力、人間性等	読んだものから必要な情報を読み取り、概要を捉え、自分の事について書こうとしている。

3 単元について

(1) 教材観

この単元は好きな動物や趣味、いつもすること等を簡単な語句や文を使って、「やり取り」をするという内容である。言語材料は単数・複数の表現、“How many ~?” “What do you ~?” となっている。大半は小学校外国語科において音声で慣れ親しんだ表現である。そのことを踏まえ、この単元では「やり取り」を通して既習事項の復習を図りながら、「読むこと」「書くこと」へと発展させ、「思考力・判断力・表現力等」の力の育成を図る。2学期以降には「読むこと」「書くこと」の題材が増えてくるため、自然と2領域へ向かえる姿勢を育てたい。最終的には社会的な話題についての読み物を読み、自分の考えやその理由まで書くことのできる力へとつなげていきたい。

(2) 生徒観

担当3クラス(103人)において、「英語に関するアンケート」と「レディネステスト」を実施した。「英語が好きかどうか」については半分以上の生徒が英語を好きではないという結果が出た。これまで1年生の前半期では「好き」と答える生徒が多く、今回このような結果が出たことに驚いた。その一方で、アンケートの結果では、多くの生徒が英語の必要性や重要性を自覚しており、英語力を身に付けたいという気持ちを抱いている。そのため、授業を真剣に取り組む生徒も多いことが予想でき、教師の指導により、「英語ができる」という実感を持たせば、「英語が好き」と答える生徒も増えていくのではないかと考えられる。「英語を読んで概要や要点を捉えていますか」では約半分の生徒が一文ずつ読んで理解するのではなく、理解可能な単語を拾い上げながら大まかに内容を把握しようとする力がすでに身に付いていることが分かった。「自分の考えを整理し簡単な英語で書いていますか」「聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを英語で書いたりしていますか」では、3分の1の生徒が書く活動になかなか取り組めていないという結果が出たが、この背景には、小学校外国語科で取り扱う範囲ではなかったことと、中学校1年の前半期では取り組む機会が少ないということがある。

レディネステストの結果においては、3文字～6文字の単語20問出題した。また、小学校移行時期の教科書「We can! 2」のUnit1から5文の意味を尋ねた。1回目は自分で解き(「音声なし」)、2回目は教師が読み上げて(「音声あり」)同じ問題を解かせた(図5参照)。

「音声なし」の正答率よりも「音声あり」の正答率が高く、音声として意味を認識しているが、文字としての認識力が低いという実態が見られた。この結果から読み取れるように、音声で認識できても、文字として認識する力が不十分である。1年生の前半期の生徒という実態を踏まえると、「読むこと」の活動を充実させる為にも、教科書の内容等を音声でしっかりと慣れ親しませた後に、文字で認識させ、音読などの練習を十分に積み、その上で「読むこと」「書くこと」の「思考力・判断力・表現力等」を育む活動を行う必要があると考える。

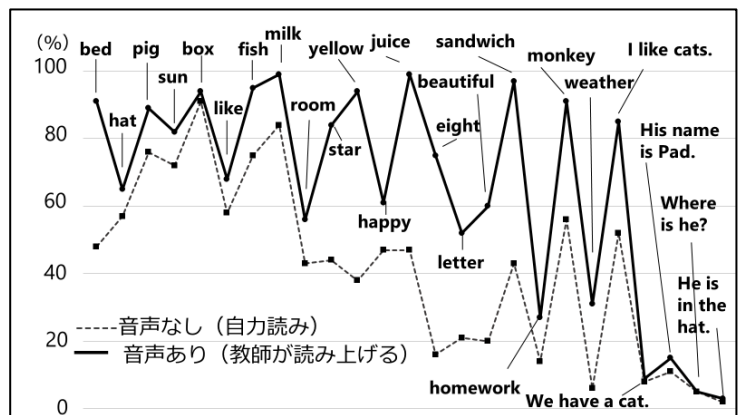


図5 レディネステストの結果 (正答率) N=103

(3) 指導観

本単元では、初めての「読むこと」への挑戦であるため、なるべく「読むこと」への負担のない活動としたい。そのために教科書の内容を十分に音声で慣れ親しんだ後に、推測可能な単語を入れる程度の理解可能な読み物教材を与え、「読むこと」の活動を行う。できるだけ教科書の内容に即したものとし、入門期には負担が大きいと考えられがちな「読むこと」の指導を可能にし、「読むこと」の次の段階へと続く足がかりとする。また、入門期の中学1年生にとっては「読むこと」以

上に「書くこと」は難しい領域と考えられるが、これまでに学んできた語句や文を用いて「自分の考えや気持ちなどを書くことができる」という実感を持ってもらいたい。

これまでの学習や経験の中で触れてきた語彙や表現及び中学校で扱う語句や文を用いた文章を読み、大まかに内容を捉えた上での「書くこと」の活動を通して、「思考力・判断力・表現力等」の育成につながる授業の工夫を行っていきたい。読み書きの意欲を高めるためにも、実態を把握した上で、生徒に合った指導の工夫を行っていく。

なお、教科書はダイアログ（二人以上が交わす会話）の形となっているため、モノログ（1人で話す形）へと形を変え、自作教材として手紙文を活用する。自作教材においては、生徒が興味を抱き主体的に読み、書きたいと思えるような題材となるよう工夫をしていく。

4 評価規準（「読むこと」「書くこと」）

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
読むこと	【知識】 (1)単数・複数(2)how many～(3)What do you～?を用いた文の構造を理解している。 【技能】 (1)単数・複数(2)how many～(3)What do you～?を用いた文の構造の理解を基に、日常的な話題について、簡単な表現が用いられている短い文章から必要な情報を読み取り、概要を捉える技能を身につけている。	自分の考えや気持ちを書くために、身近な人について書かれた短い文章から、必要な情報を読み取り、概要を捉えている。	自分の考えや気持ちを書くために、身近な人について書かれた短い文章から、必要な情報を読み取り、概要を捉えている。
書くこと	【知識】 (1)単数・複数(2)how many～(3)What do you～?を用いた文の構造を理解している。 【技能】 (1)単数・複数(2)how many～(3)What do you～?を用いた文の構造の理解を基に、自分の考えを簡単な語句や文を用いて、また、それらを正確に用いて書く技能を身につけている。	身近なことについて書かれた短い文章を受けて、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて書いている。	読み手に配慮しながら、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて、主体的に英語で書こうとしている。

5 指導と評価の計画

時間	・ねらい(■) ・主な言語活動等(丸数字) 【観点での評価 ◎記録の為の評価 ○指導の為の評価】	知 技	思 判 表	態 度
	■ 単元で身につける目標を理解する 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた文章から必要な情報や概要を読み取り、自分の事について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。 ①授業の流れと評価方法を確認する。(small talk、やり取り、既習事項の活用、評価等の確認) ②「自己目標」「目標達成のための工夫」を記入する			
1	■ 身の回りのものに数をつけ加えて表現する。(知識・技能) ①teacher talk「週末のでき事について」→②本文の内容理解【聴いて概要をつかむ】→新出単語や単数、複数形の特徴やきまりに気づき理解する→「音読練習」→「やり取り」(筆箱の中身を伝え合う)(20sec×2) ③主に「技能」を評価する問題【読むこと】④まとめ、振り返り	○		
2	■ 簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取り、自分の事について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。(思考力・判断力・表現力) ①やり取り(筆箱の中身を伝えあう)→②音読→③「手紙を読んで、返事を書く」問題に取り組む【読むこと】【書くこと】→④まとめ、振り返り		○	○
3	■ How many ～?を使って相手に持っているものについて尋ねたり応答したりする。(知識・技能) ①前時での「読むこと」「書くこと」の問題解説 必要な情報の読み取り方、概要の捉え方、手紙への返事の手書き方を指導→②本文の内容理解【聞いて概要を捉える】→③新出表現導入 How many～?の意味を推測する。特徴やきまりに気づき理解する→④音読→⑤「技能」に関する問題【書くこと】→⑥まとめ、振り返り	○		
4	■ 簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取り、自分の事について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。(思考力・判断力・表現力) ①やり取り(筆箱の中身を伝えあう)→②音読→③「手紙を読んで、返事を書く」問題に取り組む【読むこと】【書くこと】→④まとめ、振り返り		○	○
5	■ 相手に普段行っていることの尋ね方 What do you ～?を理解し、尋ねることができる。(知識・技能) ①「やりとり」(How many ～?を使ったやり取り)→②本文の内容理解【聴いて概要をつかむ】→③新出表現導入 what do you ～?の意味を推測する。特徴やきまりに気づき理解する→④音読→⑤「やりとり」(What do you ～?を使う)→⑤「技能」に関する問題【書くこと】→⑥まとめ、振り返り	○		

6	<p>■簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取り、自分の事について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。(思考力・判断力・表現力)</p> <p>①やり取り(筆箱の中身を伝えあう)→②音読→③「手紙を読んで、返事を書く」問題に取り組む【読むこと】【書くこと】→④まとめ、振り返り</p>	○	○
7	単元のまとめ(文法事項の復習・手紙の読み方書き方の再確認)		
8	ペーパーテスト・アンケート・単元を通した自己評価記入	◎	◎

6 本時の指導(第6時/全8時間)

(1) 本時のねらい

簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取り、概要を捉え、「目的・場面・状況等」に応じて自分の事について、簡単な語句や文を用いて書くことができる。

(2) ねらいを達成した生徒の具体の姿

○自分の考えや気持ちを書くために、身近な人について書かれた短い文章から、必要な情報を読み取り、概要を捉えている。

○身近なことについて書かれた短い文章を受けて、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて書いている。





(3) 評価方法


「思考・判断・表現」の問題を作成し、その結果を見取り評価に繋げていく。「主体的に学習に取り組む態度」に関しては、毎時間の授業観察および、毎時間の振り返りシートを活用し自己の学習を調整しようとする側面を見取りながら評価していく。

(4) 本時の重点指導内容

自分の考えや気持ちを書くために、身近な人について書かれた短い文章から、必要な情報を読み取り、概要を捉え、読み手に配慮しながら、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて、主体的に英語で書いている。

(5) 本時の展開

過程	学習活動	発話・指導上の留意点	検証の視点
導入 15分	<p>1 Greeting</p> <p>2 めあての確認</p> <p>めあて：校長先生からの手紙を読んで、返事を書こう。</p> <p>3【前時の確認】 2Cの文法事項の確認を「やり取り」を通して行う</p> <p>生活経験・既習事項の想起 (1)「何を○○するのか話してみよう」 ①生徒同士でやり取り(30sec) ②生徒同士でやり取り(30sec)</p> <p>音読練習 教科書p34を読む練習 後読み：教師の後について読む 個人読み</p>	<p>T: How are you? What day is it today? What date is it today?</p> <p>T: Today, we've got a letter again.</p> <p>T: OK, everyone. Let's review and warm-up. Osan, I watch dramas on TV. What do you watch on TV? S: I watch ○○ on TV. T: Oh, really? I want to watch that. Thank you.</p> <p>T: Now, your turn, everyone. let's talk in pairs. Look at the screen, please talk about sports. Student at right side, please be the first speaker. Ready? Start! ※2度繰り返す。</p> <p>T: Thank you. You speak better than before! Good!! Very good! I am so happy with that.</p> <p>T: Now, Next warming up is reading. Open your textbook to p.34. First, please read it aloud by yourself. OK, now repeat after me. Let's read the textbook only yourself four times. And then, you sit down and read it three times again as usual. Thank you very much.</p>	<p>検証の視点</p> <p> やり取りの様子</p> <p> 音読練習の様子 音声と文字を一致させるため、音読を何度も行う</p>
展開 30分	<p>【思考力・判断力・表現力】 先生からの手紙を読んで問題を解き、返事を書く</p> <p>読む活動 生徒自身で読む ※一人で読んで、問題を解く</p> <p>問題の答え合わせ ※概要・必要な情報を捉える</p> <p>書く活動(1回目) 書きたいことを整理しながら辞書や教科書などを使用しながら手紙を書く。</p> <p>交流時間 ※グループで回し読みをしながらアド</p>	<p>T: Today, we have a letter from a teacher at Itoman JHS. Today's letter is from "our principal." ※校長先生からの手紙を配布</p> <p>T: I'll give you seven minutes to read. Please take notes while reading. Ready? Start. ※机間指導を行い、手立ての必要な生徒には別紙でヒントの書かれた文章を配布する。</p> <p>T: OK. Stop writing. Now, let's check the answers. What did you get?</p> <p>T: Now, let's write a letter to Kocho-sensei. I'll give you ten minutes. You can use your textbooks, dictionary and notebook. ※手立ての必要な生徒には参考資料を配布する。</p> <p>T: Now, let's stop writing here. Let's show each other. Share with groups. And give some comments to your friend's letter to make it better.</p>	<p>視点1 「読むこと」「書くこと」における思考力・判断力・表現力等の力が身につけているか。</p> <p> 手紙を読んでいる様子</p> <p> 返事を書いている様子</p>

5分	バイス等を書いていく。 ※生徒の作品を提示し、参考にできそうな点を紹介する 書く活動（2回目） ※書き加えたり、書き直したりする	OK. Now, you got some comments and hints from your friends. So let's add and rewrite it if you need. Go back to writing.	 交流の様子
5分			
まとめ 5分	1 振り返り ※「読むこと」に関して何ができて、何ができなかったか。次回頑張りたいことを書く	T: Let's write 振り返り。「校長先生の手紙を読みましたが、どんなことができて、どんなことができなかったか、また次はどんなことを頑張りたいかを記入してください。」 T: That's all for today.	視点2 「読むこと」「書くこと」の意欲を高めることができるか。

(6) 本時の評価基準

【読むこと】

知識技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	○「概要を捉える問題」5文以上を捉えていて、且つ不必要なことを書いていない。「必要な情報を読み取る」問題では不正解でも構わない。	問題に粘り強く取り組む姿勢が見られ、自己評価シートに文法事項で何ができた／何ができなかったなど自己調整を図っている記述が見られる
b	○「概要を捉える問題」5～6文を捉えているが、概要と関係のないことを書いている。 ○問題3～4答えている。「必要な情報を読み取る」問題では不正解でも構わない。	問題に粘り強く取り組む姿勢が見られる
c	○概要を捉える問題に0～2文のみ答えている。	取り組む姿勢が見られない

【努力を要する生徒への手立て】 ○ヒントが多く提示された別紙を配布し、読むことへの粘り強い取り組みを支援する。

【書くこと】

知識技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	手紙文の内容を受けて、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて書いたり、新たな表現を追加したり、読み手を意識したりして書いている。	読み手に配慮しながら、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて、新たな表現を加えて主体的に英語で書こうとしている。
b	手紙文の内容を受けて、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いてコミュニケーションに支障がなく書いている。	読み手に配慮しながら、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて、書かれた文章を参考に主体的に英語で書こうとしている。
c	手紙文の内容を受けて、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて書いていない。	読み手に配慮しながら、自分の考えを整理し簡単な語句や文を用いて、主体的に英語で書こうとする態度がみられなかった。

【努力を要する生徒への手立て】 ○例文を載せたシートを提供し、自分の気持ちに合った表現を参考にして書くよう声かけをする。

V 研究の結果と考察

研究の考察は、事前・事後アンケート及びレディネステスト、ポストテスト、自己評価シート、授業観察（写真やビデオ記録を活用）を基に行った。

1 単元を通じた技能統合的な活動の実践

「単元を通じた技能統合的な活動」の実践で「思考力・判断力・表現力等」の力を、どう身につけていくかを考えた。まず、本単元は3つのパートに分かれているため、各パート2時間の設定とし、1時間目で「知識・技能」2時間目で「思考・判断・表現」に重きを置いた授業とした。1時間目の授業では新出単語や文法、教科書の本文を理解し、音読練習を行った。2時間目の授業では「やり取り」「音読」を経て、「思考力・判断力・表現力等」を育む技能統合的な活動とした。

「思考力・判断力・表現力等」の力を育むための技能統合的な活動として、本研究では「同じ学校の先生（あまり面識のない先生）からの手紙受け、その手紙に返事を書く」という自作教材を作成した。1回目はどのくらい読み書きができるかを見取るため、自分の力だけで取り組んでもらった。そして、次の時間で読み方、書き方の指導を行い、2回目、3回目は辞書を使ったり、友達と相談したりしながら活動を進めた。回を重ねるごとに読み方、書き方を理解し、読むスピードや書くスピード、書く文章の量も増え、内容も充実してきた（資料1に生徒AとBの事例を記載）。

2 「思考力・判断力・表現力等」の育成を図る実践

(1) 「読むこと」における「思考力・判断力・表現力等」の育成について

本研究では、「読むこと」の領域の目標ア、イの力の育成を目指し実践してきた。音声で慣れ親しんだ文に加えて、教科書で学ぶ単語や文をできる限り活用し、推測可能な単語を入れる程度の理解可能な読み物教材を作成し、実態に応じた負担の少ない活動を目指して取り組んできた。レディネステストの結果から、音声で認識できても、文字として認識する力が不十分である生徒がほとんどであったため、音読の活動を十分に行うことが「読むこと」の活動を進めるためには必要不可欠であった。そのため、「思考力・判断力・表現力等」の活動の前には、必ず音読練習を取り入れ、音声と文字を一致させてから活動を進めていった。

手紙文は同じ学校の先生の自己紹介を基にした内容となっており、目標ア、イの力が身についているかを図るため、「必要な情報を読み取る」「概要を捉える」に関する問題を出題した(図6参照)。

「概要を捉える」問題については、「○○先生の手紙を読んで、先生のことについて簡単にメモしてみよう」とし、自己紹介に、書き手と直接関係のない情報を含ませ、その情報を取り除いてメモできるかを見取った。力のある生徒は書かれていること全てをメモする傾向があり、「概要を捉える」という力を身につける

3年生所属の○○先生から手紙が届きました。○○先生は皆さんのことが知りたいようです。○○先生の手紙を受けて、みなさんも○○先生へ返事を書いてみましょう。

Hello, I'm ○○. I'm 35 years old. I'm from Itoman. **Itoman is famous for Itoman Ha-re festival. You can enjoy it.** I teach English. English is fun and interesting.

I like animals. I love cats, but I have no cats. I like cats better than dogs. Cats are so cute. I want two cats, but my wife and kid want a dog. **Do you have any animals?** Thank you.

※wife...妻 better than A...Aより○○だ。

下線部分は「概要を捉える」場合、書き手と直接関係のない情報とし、問題1を解く際には、下線部以外を書くことを意識させる。

下線部は「必要な情報を読み取る」際、ポイントとなる「質問文」である。

1. ○○先生の手紙を読んで、先生のことについて簡単にメモしてみようと思いました。日本語でメモしてください。(概要を捉える)
2. ○○先生に返事を書くために、あなたが必ず伝えるべきことの一つは何ですか。下から選んでください。(必要な情報を読み取る)
 - (1) あなたの好きな教科
 - (2) あなたの住んでいる所
 - (3) あなたが動物を飼っているかどうか
 - (4) あなたの年齢

るためには効果的な問題であったと考える。分からない文章や単語があっても最後まで粘り強く読み続け、分かったことからメモしていくことを指導することで、分からない箇所にも固執することなく最後まで読むことができる生徒の様子が見られた。手立てが必要な生徒に関しては、ヒントを多めに載せた別紙を配布し、活動を取り組みやすいものとした。「必要な情報を読み取る」問題については手紙文の中に、送り主からの質問文を挿入することで、返事を書く際に「必要な情報」とした。たとえば「Do you have any animals?」を手紙文に挿入し、返事を書く際にはこの質問に答える必要があることを認識させた。

類似問題を4回実施することとなったが、1回目と4回目をテスト形式とし、その成果を比較した(図7参照)。検証授業の評価基準と同じような視点を持って評価を重ねていった。

1回目は9点満点。4回目は10点満点の問題である。既習事項7文のうち、4~7文読み取れてb、3文以下をc、既習表現に加え未習表現1文以上、つまり8文以上を読み取れてaとした。しかし、「概要」以外を書いていた場合は、8文以上捉えたとしても評価はbとなる。

1回目では概要を捉えることができなかった生徒も、指導を重ねる毎に「概要の捉え方」を身につけ、4回目にはaの生徒が18ポイント、abの生徒合わせて22ポイントも増え、指導の成果が出た結果となった。

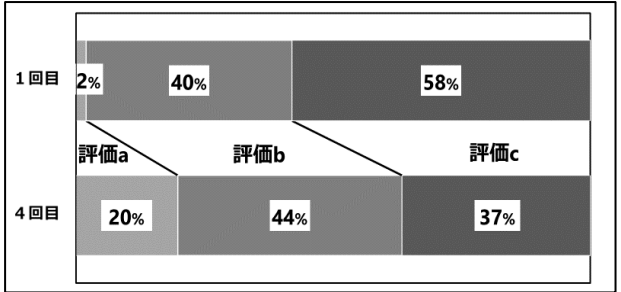


図7 「概要を捉える問題」の評価の変容

「必要な情報を読み取る」問題では1回目と4回目で優位な差が見られなかったが、誤答の中で興味深い結果が見られた。1回目の正解は(3)であったが、誤答においては(1)(2)(4)の選択肢全部が選ばれていた。その様子から偶然性が生み出す誤答が多かったと考える。4回目では選んだ選択肢が全員一致しており、選んだ解も正解と間違えてしまいそうな選択肢であった。つまり、4回目では、間違えたもののしっかり考えた結果の誤答であったと推測できる。このことから、「必要な情報を読み取る」方法も着実に身につけてきているものと考えられる。よって、「読むこと」の領域の目標ア、イの力の育成は指導を重ねる毎に高めることができたと考える。

一方、「必要な情報を読み取る」の指導として、「〇〇先生に返事を書くために、あなたが必ず伝えるべきことの一つは何ですか。」という問題文を作成して実践してきたが、書き手の「質問文」を捉えることにポイントを置いて指導していたため、概要を捉えていなくても「質問文」の意味さえ捉えていれば答えられる形となってしまう。今回の手紙文においては、「必要な情報を読み取る」設問を挿入すること自体が難しかったのかもしれない。さらに、「概要を捉えること」と「必要な情報を読み取る」こととは相関があると考えていたが、今回の結果からは相関がないことが推測され、「必要な情報を読み取る」指導と評価においては改善が必要である。

(2) 「書くこと」における「思考力・判断力・表現力等」の育成

本研究では「書くこと」の領域の目標アの力の育成を目指し実践してきた。評価規準にも載せているように「正確に書く」を「知識・技能」、「関心のある事柄を簡単な語句や文を用いて書く」を「思考・判断・表現」とし見取ることとした。1回目では何を書いて良いかわからない生徒も多く、空欄で提出する生徒が多かったため、「読むこと」同様に書き方の指導も行った。まず、相手は話したことの無い先生だったりするので、まずは「自己紹介から始めたほうが良い」、手紙の中で質問してきているので、「質問されたことには答えること」、自分も同じことを感じていれば「〇〇, too」という表現を加えることも自分の気持ちを伝えようとしていて良い、「最後に相手に別のことを質問して終わると相手に興味を示していることが伝わる」など、何を書いてよいかわからない生徒へ手掛かりとなる手立てを示し、書き方の指導を行った。また、手立ての必要な生徒は「お助け表現カード」を配布し、返事文の中ですぐに使えるような表現を紹介した。指導後は回を重ねるごとに書き方のポイントを押さえ、書くスピードも早くなり、内容も充実したものとなってきた。

どちらも辞書などを一切使用せずに書いた文章である。生徒AとBのように1回目では0文～2文程度しか書けなかった生徒が、4回目を迎えるころには5文～7文と自分の伝えたいことを整理し書く生徒が増えた(資料1参照)。

I'm 12 years old. I'm from Itoman.
I don't have animals.
But I like dog.

↓

生徒A (1回目)

I'm _____ 生徒の名前 _____ I like music too.
I love "king Gun". He is famous singer.
I like sports, too. I play tennis. I like
"Kei Nisikori". He is the No.1 tennis player
in Japan. Do you know "Kei Nisikori"?
Thank you.

生徒A (4回目)

I'm 12 years old. I'm from Itomanis

↓

生徒B (1回目)

Hello, I'm _____ 生徒の名前 _____ I like music.
I love "Kenshi Yonezu". Yes, I like sports
I play Basketball. I love "Yuki Togashi".
Do you play basketball? Thank you.

生徒B (4回目)

資料1 【生徒AとBの1回目と4回目の返事文】

3 「読むこと」「書くこと」の意欲を高めることができたか（振り返りシートとアンケートから）

単元が始まる前の時間に単元の目標を紹介し、その目標を達成するための「自己目標」と「目標達成のための工夫」を書いてもらった。その後は毎時間、自己評価シートを記入させ、自らの学習を調整しようとする側面を見取れるようにした。同時に、毎回生徒のコメントにフィードバックし、できたことを認め、次はどのようなことに気を付けると良いかなど、次の授業へとつながるようなコメントを書いた。単元の終わりにはほとんどの生徒が、「最初の頃よりもすらすら読めるようになった」「書ける文章が増えた」「何度も繰り返したから書けるようになった」など、次の単元でも頑張っていきたいという前向きな気持ちを記入していた（資料2参照）。

生徒C	前は全然読めなかったけど、今思うと結構成長したなと思った。だから今は英語に一番自信がある。
生徒D	最初に書いた手紙の返事は、1行しか書けなかったけど、4回目の手紙の返事では4行書けるようになった。英文を毎日書いていたから最初と比べて結構書けたんだなと思った。
生徒E	小学校の頃より英語力が上がった気がした。自分の書きたいことが書けるようになった。
生徒F	前より読み書きができるようになった。自分の目標に向かって、それにたどり着くまでに時間はかかったけど、上手に読めたり書くことができてうれしかった。これからも色々なことに挑戦して上達できるようにしていきたい。

資料2【単元を通してできるようになってきたこと、またその理由】

最後に、事前調査で実施したアンケートを再度行いその変容を検証する。ここでは本研究に関わる項目の結果を表6に示し比較検討する。3項目は本研究で実践してきた内容について尋ねている。「英語を読んで概要や要点を捉えているか」では約8割の生徒が肯定的に答えており、ほとんどの生徒が概要を捉える活動に取り組んだことが伺える。「自分の考えを整理し簡単な英語で書いているか」においては、46ポイントも増加し、現時点での力を発揮し、自分のことを書く努力をした生徒が増えた。「聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを英語で書いたりしているか」についても47ポイント増加し、手紙を読んで返事を書くという技能統合的な言語活動に取り組んだことが伺える。

表6 英語のアンケートに関する結果

アンケート項目	あてはまる ややあてはまる	
	事前	事後
英語を読んで概要や要点を捉えていますか	55%	82%
自分の考えを整理し簡単な英語で書いていますか	26%	72%
聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを英語で書いたりしていますか	19%	66%

以上のことから、本研究で取り組んできた「読んだ手紙に返事を書く」という目的、場面、状況の設定が「読むこと」「書くこと」の活動に必然性を生み出し、自然と取り組むことができたと考える。また、「先生からの手紙」という設定は生徒の気持ちを惹きつけ、意欲的に「読むこと」「書くこと」に取り組むきっかけとなったと考える。

4 検証授業のまとめ（本研究を実践する上で、改めて気づき、実感したこと）

(1) 「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の指導のバランスを考えること

これまでの実践では、「知識・技能」の定着を重視し、「思考・判断・表現」の活動が十分ではなかった。今回、「知識・技能」の定着は宿題を中心とし、授業では「思考・判断・表現」に重点を置いて行った。その結果、「読むこと」「書くこと」の活動を通す中で「知識・技能」の定着が図れている様子が伺え、「思考・判断・表現」と往還することで確実に基礎的・基本的な知識及び技能が定着できると実感できた。ここで一度、これまでの授業スタイルを崩す勇気を持ち、家庭学習と連動しながら「知識・技能」の定着を図る必要があると考える。

(2) 多読多聴の必要性

(1)につながるが、これまで多読多聴が必要だと感じている中、教科書の内容だけをこなすだけで終始してしまっていた。今回教科書で学んだ言語事項をふんだんに盛り込んだ自作教材を使用することで多読の機会を増やし、教科書の内容以上に力をつけることができたと考える。

(3) 辞書を使うタイミング

「読むこと」の指導の中で、辞書の活用を許可すると一語一句調べる生徒が見られ、時間内に読み終わることができず、次の活動まで進めない生徒が見られた。手立てのつもりが逆効果となった。自力で読ませ、分からない箇所にも固執せず最後まで読みきることのできる力、「あいまいさに耐える力」の育成が必要であると痛感した。その後は、「読むこと」の活動を重ねる毎に細かいことに捉われず読み通せる生徒も増えてきた。

(4) 「本文を覚えて読める」に潜む危険性

これまで、音読テストで暗記した生徒に感心したり、聞いたり話したりができる生徒を「英語力がある」と判断してしまいがちであった。しかし、本研究において、音声で理解ができていても文字として認識できていない生徒が多数いることが判明し、いかに「読むこと」が難しいことであるかが浮き彫りとなった。このことから、「本文の音読練習の際には必ず教科書の文字を目で追いつながり読むこと」「教師の後について読ませる際も目は教科書の文字を追うこと」といったように、これまで以上に音読の指導を重視することが必要であると考えられる。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 「読むこと」「書くこと」の技能統合的な言語活動を実践することによって、「読むこと」「書くこと」の意欲を同時に高め、主体的に取り組む態度を育てることができた。
- (2) 生徒の実態に応じ、教科書で学ぶ表現等をできる限り活用し、推測可能な単語を入れる程度の理解可能な読み物教材を自作し、単元を通して技能統合的な活動に取り組み、「思考力・判断力・表現力等」の育成を図ることができた。また、回を重ねる毎に、「英語で文章が書ける」という実感を持たせることができた。
- (3) 難しいと思われる教材でも、指導を継続することで生徒は活動に慣れ、短期間でも力を伸ばすことができた。

2 今後の課題

- (1) 2021年度より3観点での評価となるため、評価基準の立て方を熟考する必要がある。さらに「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を図る教材開発の工夫改善が必須である。
- (2) 本研究を始めるにあたり、小中連携の必要性を改めて感じ、これまで以上に小中連携を密に図り、接続期にどのような授業ができるかを考えていくことで、より効果的な指導ができると考える。
- (3) 今回は、中学1年生の前半期でも「読むこと」「書くこと」の技能統合的な活動が可能となった。2年生、3年生では、学習する言語材料が増えるので、さらに発展させた技能統合的な言語活動を実践していきたい。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|-----------|------------------------------------|-----------|-------|
| 国立教育政策研究所 | 『「指導と評価の一体化」のための評価に関する参考資料 中学校外国語』 | 東洋館出版社 | 2020年 |
| アレン玉井光江編 | 『小学校英語の文字指導リテラシー指導の理論と実践』 | 東京書籍株式会社 | 2019年 |
| 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 | 開隆堂出版株式会社 | 2018年 |
| 小島弘道 監修 | 卯城祐司・アレン玉井光江・バトラー後藤裕子 著 | | |
| | 『リテラシーを育てる英語教育の創造』 | 学文社 | 2013年 |
| アレン玉井光江 著 | 『小学校英語の教育法 理論と実践』 | 大修館書店 | 2010年 |
| 和泉伸一 著 | 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 | 大修館書店 | 2009年 |